



森隆幸さん(右)と一緒に面会に訪れたひ孫の手をさする和子さん=4月22日、特別養護老人ホーム「厚別栄和荘」(金田淳撮影)

特養の面会緩和 続く葛藤

新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置付けが、季節性インフルエンザと同じ「5類」に移行してから8日で1年となる。道内の特別養護老人ホームでは、入所者と家族らの面会の時間制限などを緩和する動きがある一方で、クラスターへの懸念が強く踏み切れない施設も。介護現場では葛藤が続いている。

コロナ5類移行1年

「元気が良かった。体調はもう札幌市厚別区の特定社会福祉施設事務士、森隆幸さん(67)は4月、東京で暮らす長女と2一緒に、特別養護老人ホーム「厚別栄和荘(同区)」に入所する母和子さん(97)を訪ねた。和さんは6歳の孫を見るのと感極まったように目をつむり「かわい、かわいね」と何度も手をさすった。

森さんが訪れるのは週1回ほどで、面会時間は15分。少しでも顔を見れば安心するし、今日ひ孫と会って心がなだんだと顔色はよくなった。

同施設での面会が現在、予約制で訪問者が入る。マスクを着用して手指消毒し、検温と健康チェックを受け、居室には入れず、食卓近くに椅子を用意。飲食はできない。以前は会議室などでアクリル板越しの面会だったが、5類移行時に変えた。

移行から1年になるのを踏ま

施設内感染の懸念 今なお

え、今月7日からは時間を30分に延ばし、予約不要で居室にも入れるようにする。家族などから面会時間の延長など緩和を望む声があったという。

家族と面会すると、普段よりたくさん話したり、認知症の進行を遅らせられたりと心身への影響が大きい。一方、クラスターへの懸念は今も根強い。入所者が感染すると、感染拡大を防ぐため、施設内のゾーン分けや防護衣と高性能マスクの着用が必要になり、職員の負担は大きい。特に夜間は職員が少な、防護衣の速やかな脱ぎ着を求めらることもある。衛生用品の購入など感染対応への国の補助も3月末で終了し、経営への負担も懸念される。

運営・雅蘭施設長は「面会の制限緩和は感染対策とバランスを取り

ながら考えていかざるを得ない」と話す。施設で「くくなる」「みどり」時は制限していない。

入所者の健康状態や介護人材の充足度など地域によっても異なり、警戒感を強く抱く施設もある。

面施設では今月1日、食事や通院介助、近づく風邪症状のある人がいる場合などを除き入所者と職員のマスクの着用義務を解除した。認知や言語機能が低下した人のコミュニケーションが難しく、熱中症の恐れもあるためという。

面会については、厚生労働省が2021年11月に「留意点」を示している。地域の感染者の発生状況を踏まえ、「可能な限り安全な実施方法を検討すること」とし、管理者が具体的な時間や回数、場所を判断。面会者に感染が疑われる症状がある場合は断ること、人数は必要最小限とし、入所者と一定の距離を確保すること、十分に換気すること、面会後は机、椅子、ドアノブなどは消毒することなどを挙げている。(山田芳祥子)

感染のリスクと面会についてどう考えるべきか、北海道医療大の塚本教授(感染管理学)に聞いた。

新型コロナウイルスと季節性インフルエンザとの比較は難しいですが、亡くなる人は新型コロナウイルスの方が多く印象です。感染症のリスクはあまりにも個人差が大きく、単純に年齢で推し量れません。認知機能低下や摂食・嚥下障害などの老年症候群の人は重症化



北海道医療大・塚本教授

北海道医療大・塚本教授

生活の質「社会で議論を」

リスクが高いと考えられます。一概にこの状況なら感染する、しないと考えたのでは危険です。入所者や施設ごとでリスクは異なるため、それらを考慮して面会方法を考える必要があります。施設として何を大切にしているか、入所者の家族との理解と協力を得られるよう、十分なコミュニケーションが必要で、クラスターが起きた施設はたかたかめしませんが高齢者が会いたい人に会えず、外出もできずに亡くなる現状に疑問を感じています。高齢者の健康と生活の質をどう考えるかはコロナ禍だけの問題ではなく、社会として真剣に議論すべきです。(山田芳祥子)